

立正佼成会発表原稿

『アフリカと日本の草の根の出会い - 真の豊かさを求めて』

平和に対して貢献をしておられる各界リーダーの皆様、ワークショップの協同参加者の皆さま、そして平和に関心を寄せておられる紳士淑女の皆様、本日は貴重な発表の機会を賜り、誠に有難うございます。

この分科会のテーマは「すべての人々の権利と尊厳：平和への青年の取り組み」とされています。すべての人々が権利を保障され、人間としての尊厳をもって生きられたらどんなに素晴らしいことでしょうか。

現在国連において、「ミレニアム開発目標」が掲げられ、世界的規模で各種の事業が推進されています。そこに示されている数値目標により事業の達成度を評価することは大変有意義であり、画期的なことです。しかし、そこで示されているのは、実は人類の生存と尊厳のための最低限の達成目標であるとも言えます。しかも、それが達成されることで、直ぐに世界の「貧しさ」から解消され、豊かさと平和が訪れるものでしょうか。

「貧しさ」という言葉の意味を、物の量だけでなく社会の仕組みや人間の心のあり方にも広げるなら、貧しいのは、必ずしも途上国ばかりではなく、先進国にも貧しさがあるのです。例えば、日本は、現在経済が繁栄し、様々な社会サービスが備えられています。しかし、その一方で、人々が隣人に対して無関心となり、隣の家の独居老人が病気で亡くなってから一週間以上も経って発見されることがありました。自殺者の数が増加し、この6年間では毎年3万人以上の方が自らの命を絶っています。

私は、先進国も途上国も共にそれぞれの豊かさと貧しさを持っていると思います。そして、物と心が調和した「真の豊かさ」が既にも実現され、世界の人々が目標にできるようなモデル国は、まだこの地球上には存在していないと思うのです。それでは、世界の人々が共に「真の豊かさ」を分かち合う社会を築くために、私達一人一人の市民には、そして青年には何が出来るのでしょうか。

立正佼成会は、これまで青年がリードする平和への取り組みとして、「一食を捧げる運動」を行ってきました。会員が月に数度、食事を抜いて空腹を味わい、世界の人々の苦難を思い、平和への祈りを込めて、抜いた食事の分のお金を献金します。その献金額は一年で約4億円になります。

この運動の精神は、「世界の生きとし生けるもののいのちを尊び、互いのいのちのつながりを大切にすることであり、「共生に向けて、分かち合いの生き方を、多くの人々に広めていくこと」を目指しています。

その基金をもとに、国内外のNGOとの協力による開発協力や人道援助、世界の紛争地の子どもたちへの手作りのプレゼントの配布、国連機関への資金協力、自然災害に際しての緊急援助などを行い、これまでに100億円を超える規模の事業を展開してきました。併せて毎年、日本全国で街頭募金を実施し、UNICEFに約60億円の支援を行ってきました。

一食を捧げる運動を背景としたそれらの活動の中から、今日は、「アフリカと日本の草の根の出会い - 真の豊かさを求めて」と題し、本会がこの21年間積極的に参画してきた「アフリカへ毛布をおくる運動」について御紹介させていただきます。

この運動は、二つの願いを持って行われています。一つは言うまでも無く「アフリカの人々の人道ニーズに応えること」です。そして、もう一つは、「日本の市民が、アフリカに関心を持ち、分かち合いの心を育てること」です。

この運動は、アフリカが大旱魃に襲われ、多くの人々のいのちが失われた1984年に、国連が世界に対して行った、200万枚の毛布緊急支援アピールに応じて始められました。アフリカには、昼間には気温が摂氏40度近くになり、夜間には10度以下になる地域も多く、貧困で体力の低下した人々にとって、毛布は身を守る貴重な財産なのです。

その後も、アフリカ各地における毛布のニーズは続き、本会を含む日本のNGOグループが、日本政府や国連との協力により、今日まで21年間、アフリカの20カ国以上の人々に対し、合計約340万枚の毛布をおくり続けてきました。昨年の配布先の国々には、エチオピア、マラウィ、ウガンダ、シエラレオネ等があります。

これらの毛布は日本の国内で集められています。その収集活動は毎年日本の全国で展開され、青年を中心としたメンバーが近隣の家々を個別訪問する方法で行われています。今年も市民から約12万枚の毛布が提供されました。その一枚一枚の毛布には提供者が友情のメッセージを書いた布が縫い付けられています。毛布は、船でアフリカへおくられ、現地の赤十字やNGOの協力により、人々に配布されます。この輸送費用に、一食を捧げる運動の基金から助成が行われています。

毛布の多くは、人々が自宅で使っていたものです。お金を集めてアフリカ現地で毛布を買うことも、有効な援助の方法でしょう。しかし、自らの使っている大切な毛布を捧げることにより、日本の多くの人々がアフリカに関心を持ち、分かち合いの心が育てられてきたのです。

また、私たちは毎年、多くの青年を含む約30人の毛布配布ボランティア隊を編成し、アフリカを訪問しています。日本人が現地を訪問し、自らの手からアフリカの人々に直接毛布を手渡すことで、一枚の毛布に込められた愛情を届けることができるのです。

日本の青年がアフリカの現地を訪問すると、貧しさだけではなく、むしろその豊かさと出会うことができます。現地への訪問を通してアフリカの豊かさに触れた一例をご紹介します。毛布の配布のためにボランティア隊がある村を訪れたときの出来事です。毛布を求める人の数は多いのですが、配布できる毛布の数はそれよりも少ないのです。そこで、病人、身障者、高齢者、子ども、妊婦など、より立場の弱い人々に優先して配布せざるを得ません。毛布が欲しくてももらえずに、我慢して見ていなくてはならない人の方が多かったかもしれません。

しかし、その村では、毛布が受け取れずに悲しんだり怒ったりする人はあまり見られず、はるかに多くの人々が、自分にはもらわなくとも、もらえる人の為に共に喜び祝福を贈っていました。青年達は身障者や高齢者が毛布を受け取るために、率先して手助けをしていました。村全体が一つの家族のように連帯する姿は、大変感動的でした。

人間が豊かな生活をおくるためには、互いの優しい思いやりと連帯もまた、大切な要素であることを、あらためて教えられたのでした。

アフリカの人々も、私たちが遠い日本から訪問したことを、心から喜んでくれます。昨年、エチオピア北部の村で出会った長老は次のように言いました。「日本の人が直接ここまで来てくれたことが嬉しい。この毛布は友情の表れであり、愛と希望の象徴である。互いの文化が会うことで素晴らしい未来が開かれるように祈る。協力し合い共に栄えていこう。」

我々日本のボランティア隊も、アフリカの村人との出会いを通して、厳しい自然環境や貧困と闘いながら生きる気高さと互いに助け合う優しさ、そして地元の NGO スタッフの人道奉仕の精神に心打たれます。青年たちの中には、自らの生き方を振り返り、日本に帰ってから地域で、アフリカに関する学習会を開き、メディアを通じてアフリカの状況を訴え、毛布の収集活動を推進する人たちがいます。また、毛布が、一食を捧げた献金によりアフリカに届けられ、人々に喜ばれていることを知り、あらためて一食を捧げる運動を積極的に行い、知人に勧めている青年が増えています。

私はこれらの経験から、アフリカと日本の、草の根の青年が様々な平和活動を通して会うことで、多くの大切なことを学び合えるのではないかと思うのです。アフリカと日本の青年同士が、相手に対して敬意を払いつつ、出会いを積み重ねることにより、「真の豊かさ」とは何かについて、共に探求していくことが出来るのではないのでしょうか。

私は、「真の豊かな世界」を実現するためには、人間同士が互いの個性を尊重し合い、文化の多様性を認めつつ、自然から与えられた限りある資源を分かち合い、思いやりを交わしつつ、共に生きることが大切であると思います。

今日はそのような世界を目指す道の一つとして、日本の青年たちが先頭に立って取り組んでいる「一食を捧げる運動」と、「アフリカへ毛布をおくる運動」についてご紹介しました。

どうぞ皆様も、月に数回食事を抜くかあるいは何かを我慢することで、世界の貧しき人々を思い、平和を願って献金する分かち合いのライフスタイルを始めてみては如何でしょうか。そのお金を基に、世界の青年たちが平和活動を通して出会い、「真の豊かさへの道」を学ぶのです。これは、「いつでも、どこでも、だれにでも、いつまでも」実践できる平和への道です。

ご清聴、誠に有難うございました。合掌

立正佼成会 一食平和基金